

社会復帰のみが更生ではない。

歩けないものが歩き、箒を持たなかつた者が箒を持ち、
フォークを持たなかつた者がフォークを持つことが更生である。
自主自由とはかかることを意味しなければならぬ。

田代馨「不自由者の自主性ということ」

生活のデザイン

ハンセン病療養所における

自助具、義肢、補装具とその使い手たち



2022年3月12日(土)～8月31日(水)

国立ハンセン病資料館

企画展示室

入場・観覧無料

●開館時間：9:30-16:30(入館は16:00まで) ●休館日：月曜、および「国民の祝日」の翌日(月曜が祝日の場合は開館)

都合により会期の変更、入場制限または予約制の導入を行うことがあります。ご来館の際は公式サイトで最新情報をご確認ください。

協力：国立療養所多磨全生園

テキスト出典：田代馨「不自由者の自主性ということ」『多磨』第41巻第11号、1960年11月

ハンセン病療養所の患者、回復者は、末梢神経障害による生活動作の不自由がありながらも、その人らしく暮らすために、さまざまな道具を活用してきました。例えば食事などの日常生活上の動作を助ける自助具、自分で歩くための義足、手足を保護しながら必要な動作を可能にするための補装具などです。

かつてはハンセン病隔離政策のもと、療養所の予算は十分でなく、多くの労働が患者によって担われていました。古くから伝わるブリキの義足や取っ手のついた鉋などは、知覚神経や運動神経の麻痺をかかえながら、患者作業や日常生活における仕事を担ってきた入所者の苦難の歴史を伝えています。1950年代後半以降、専門の職員が着任してからは、知覚を失い、思うように動かせなくなった手足を保護しつつ、使い手が叶えたい生活を実現するにはどうしたらよいかを追求されてきました。さまざまな素材の義足やカラフルな自助具つきスプーン、陶芸や音楽活動などの生きがいづくりにかわる自助具など、使い手の願いの広がりに合わせて、道具の個性が研ぎ澄まされてきたのです。こうして、一人ひとりの生活のデザインと呼ぶにふさわしい道具が多数作られ、使い手の暮らしを形作ってきたのです。

それらの道具を使う人の姿からは、限られた場での生活であっても、身の回りの小さな自由までは奪われまいとする意志をうかがうことができます。

本展ではその姿を、自助具、義肢、補装具の数々と、その使い手の映像や写真、語りなどを通してお伝えします。

ハンセン病問題への理解を深めると共に、障害のある人々が自らの可能性を追求してきた歩みへの関心を高めていただければ幸いです。



イベント情報

- 時間、申込み及び開催方法の詳細は当館ホームページ等でお知らせします。
- いずれも新型コロナウイルス感染拡大防止のため内容等を変更する場合があります。
- 詳細は本展公式サイト(下記QRコードよりアクセスできます)をご確認ください。

ギャラリートーク 担当学芸員による展示解説

当館企画展示室にて 期日や開催方法などは決まり次第お知らせします。

実際に展示されている実物資料を前にキャプションだけでは伝わらないデザインの背景などについて学芸員が詳しい解説を行います。

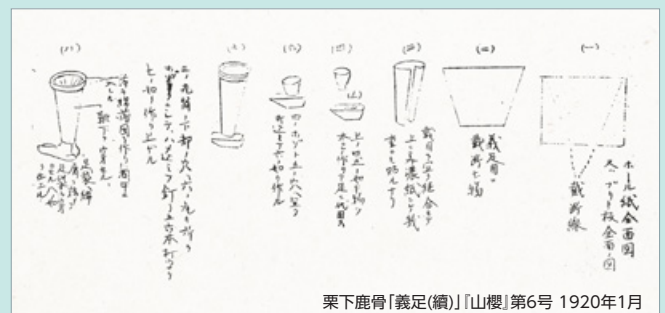
会期中は講演会なども予定しています。
詳細は追って公式サイトなどでお知らせします。

ワークショップ 「ブリキの義足」を作ってみよう

当館1階ロビーにて 期日や開催方法などは決まり次第お知らせします。

かつて患者さんが発明し、制作・使用していたブリキの義足。大正時代に作成された図面をもとに、厚紙などの身近な材料で実際に作ってみます。

大正時代に作成された図面



栗下鹿骨「義足(續)」『山櫻』第6号 1920年1月

表面資料について



交通のご案内

- 西武池袋線「清瀬駅」より(所要時間 約10分)
南口発 西武バス:久米川駅北口行き 「ハンセン病資料館」下車すぐ
- 西武新宿線「久米川駅」より(所要時間 約20分)
北口発 西武バス:清瀬駅南口行き 「ハンセン病資料館」下車すぐ
- JR武蔵野線「新秋津駅」、または西武池袋線「秋津駅」より 徒歩(所要時間 約20分)

● 駐車場あり(台数が限られています。なるべく公共交通機関をご利用ください)

